

デジタル・アーカイブ手法による社会科地域素材の教材化【3】

～ 地域の伝統・文化を「伝え合う」授業デザインの開発 ～

二ノ宮のり*¹／松井久美子*²／水端めぐみ*³／久世均*⁴／齋藤陽子*⁵

近年、情報化、国際化によって社会環境が変化してきている。そのことによって、人々の目が新しいものへと向けられ、今まで受け継がれてきた伝統・文化が失われてきている。後世まで語り受け継がれる地域の伝統・文化であるためには、記録精度が高く映像再現性に優れたデジタル映像の形で、静止画及び動画情報を収集・記録し、デジタル・アーカイブする必要がある。そこで、本研究では、地域の伝統・文化素材として、岐阜県関市の古式日本刀鍛錬を取りあげデジタル・アーカイブし、その記録をもとに小学校社会科での活用を考えた教材を開発をする。またこの開発した教材を授業で活用するにあたり、地域の伝統・文化を継承するためには、自分たちの地域の伝統・文化を子ども自身が「伝え合う」ことができることが大切であると考え、テレビ会議システムを用い、他地域と交流し、自分たちの地域の伝統・文化を継承する心を育む授業デザインを考察・研究した。

<キーワード>多視点同時撮影, 伝統・文化, 地域素材, 社会科, デジタル・アーカイブ手法,

1. はじめに

中央教育審議会答申（平成20年1月）では、「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること。」とされ、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことが述べられている。これを受け、学校教育基本法の改正と、学習指導要領の改定¹⁾がなされ、その達成すべき教育の目標の中に、明確に伝統・文化を尊重する態度を養うことが示された。また、全教育課程を通して、特に道德教育や各教科等において、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承・発展させるための教育を充実させるとされている。

現在は、平成23年度から実施される、この新学習指導要領に向け、伝統・文化の教育の在り方を模索している段階である。ゆえに、本研究において、地域の伝統・文化を継承する観点から、その教育の在り方、つまりは授業デザインを考察した。

2. 新学習指導要領

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われる。このような知識基盤社会やグローバル化は、アイディアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存、国際協力の必要性を増大させている。その中で、我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することが必要とされている。新学習指導要領では、伝統・文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国の国際社会の平和と発展に寄与することのできる児童生徒の育成のために内容の充実を行ったとされている。このようなことから、小学校における伝統・文化の教育が必要であることが明らかである^{1～3)}。今回、地域の伝統・文化を教えて

論文受理日：平成22年11月21日

*1 NINOMIYA, NORI *2 MATSUI, KUMIKO *3 MIZUBATA, MEGUMI *4 KUZE, HITOSHI *5 SAITO, YOKO : 岐阜女子大学

いく教科として、社会科に着目してみた。新学習指導要領小学校社会科の目標では次のようである。

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

今回の学習指導要領⁴⁾・⁵⁾で改訂においても、小学校社会科においては、「我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て」と教科目標の中に、これまでの日本を理解していくことが挙げられているのである。その中で、日本特有の伝統・文化を受け継ぎ新しい文化を築き上げ、より良い社会にしていくことを重視していると考えられる。

3. 知の伝承サイクル

あらゆる伝統・文化の基礎は、地域の伝統と文化にあり、我々はこれらの伝統の先端に生きている。伝統から文化を同時代性をもって創造していくことが、文化の創造であると考えている。だが、近年の科学技術の発展、情報化、国際化などが発展し、人を取り巻く環境が大きく変化してきた。この大きな社会の変化の中で、新しいものへの開発に力を注ぎ、人々の中から失われつつあるものがある。これまで受け継がれてきた慣習や信念、芸術等、「文化」が失われようとしている。もしくは、受け継がれても、あいまいとなっている。現在、それらは適切な手が打たれぬまま、失われようとしている。その失われようとしている伝統・文化をくい止めていく必要がある。このような近年失われつつある地域の伝統・文化に対して、それを伝統の最先端を行く子どもたちが、後世に継承していき、伝統・文化を継承していくように、していくことが大切である。そこで、子どもたちが、伝統・文化について身近に学ぶことができる場として、学校の授業を考えた。地域の伝統・文化を取り入れていく単元としては、小学校社会科では第3学年及び第4学年において、自分たちが住んでいる身近な地域について学習をしていく。この中に、地域の伝統・文化素材を取り入れて教材化していく。地域の子ども

たちが地域の伝統・文化を継承していく授業デザインを考案する。そして、後世に受け継いでいく、云わば「“知”の伝承サイクル」を目指した教材開発及び授業デザインの開発を行っていく。

4. 伝統・文化のデジタル・アーカイブ手法 ～古式日本刀鍛錬～

伝統・文化素材として、本研究では、岐阜県関市の古式日本刀鍛錬を取りあげる。関市の代表的な伝統・文化として、日本刀の鍛錬がある。この日本刀の鍛錬は、関市の伝統・文化教育として大切な題材であると考えられる。そこで、形に残る伝統・文化の題材として、身近な古式日本刀鍛錬を題材とした。

この古式日本刀鍛錬の始まりは、今から約780年前、九州(大宰府)の刀匠六郎左衛門「元重」が関へ移り住み、はじめて関市で日本刀が作られたことに起因する。古式日本刀鍛錬の祖である元重は、利刀の名人であり、亀山天皇のとき、大宰府から京に召されて御用鍛冶を勤めた。1263年に関市に来て住み、関鍛冶の祖となったのである。そして、現在まで古式日本刀の製法は、受け継がれてきたのである。

このような780年もの長い歴史をもつ、古式日本刀鍛錬であるが、関市に住む子どもたちでさえ、その歴史や製法や鍛錬の様子を詳しく知らなかったり、見たことがなかったりするものが現状である。古くから伝わる関市の伝統が後世へ正しく継承されていくのか危惧される。後世まで語り継がれ受け継がれる古式日本刀鍛錬であるためには、何らかの形で古式日本刀鍛錬を残しておく必要がある。そこで、記録精度が高く映像再現性に優れたデジタル映像の形で、静止画及び動画情報を収集・記録し、古式日本刀鍛錬の様子をデジタル・アーカイブする必要がある。今回、古式日本刀鍛錬の様子多視点同時撮影手法を用いて撮影した。

多視点同時撮影の手法⁶⁾は、カメラを左右両方からの撮影と刀鍛冶の様子を上から撮るための天井のカメラ、刀匠を正面から見るための正面のカメラ、刀匠の動きや刀の様子を追うためのカメラ計5台のカメラを設けて、多視点同時撮影を行った。この時、刀匠の動きや刀の動きを担当するカメラと天井のカメラ以外の3台のカメラは、刀鍛冶が行っている

場所から、同じ距離だけ離れており、カメラの高さもそろえている。このカメラの設置の仕方には、多視点で4画面のDVDを作成したときにそれぞれが違うと、映像の様子が違って見えてしまい、同時性をもった多視点映像ではなくなってしまう。よって、今回の撮影では3台のカメラの距離と高さを合わせて行っている。

この際に、撮影した内容は以下の3点である。

- 1) 古式日本刀鍛錬の実演
 - 2) 刀匠からの日本刀が完成するまでの工程
 - 3) 子どもからのインタビュー
- 実際の撮影の様子は図1～3の通りである。

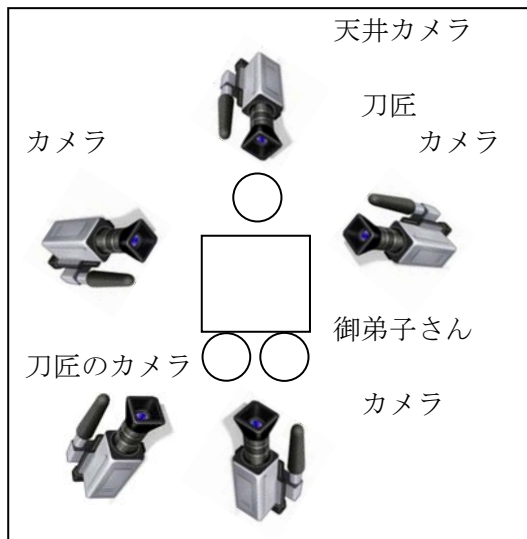


図1.カメラ配置図



図2.撮影の様子



図3.刀鍛冶の様子

5. 地域の伝統・文化を継承していくための教材及び授業デザイン開発

地域の子どもたちが地域の伝統・文化を継承していくためには、小学校教育において、その学習を行っていくことが効果的であると考える。小学校教育、特に社会科においては、小学校第3学年及び第4学年において、自分たちが住んでいる身近な地域について学習をしていく。その中で、自分たちの地域を知り、地域の良さに気付き、地域に誇りをもつことで、地域に愛着をもつ心をはぐくむことができる。この心が、自分たちの地域の伝統・文化を継承していく、受け継いでいきたい、語り継いでいきたいという思いとなる。

そこで、これらの地域の伝統・文化が後世にも継承されていくよう多視点同時撮影を行った。後世に正しく伝えていくために記録し、それを授業に生かしていくための撮影である。その撮影した記録をもとに、自分たちの住んでいる身近な地域や市(区, 町, 村)についての授業の一場面に活用できるDVD教材(図4, 図5)を作成した。



図4. DVD教材 1



図5. DVD教材 2

このDVD教材は次のような構成になっている。

- ① 古式日本刀鍛錬の様子（刀匠のカメラ映像）
- ② 日本刀実践までの説明（刀匠による）
- ③ 関市に住む児童からの質問及び解答

2009年広島大学学部・附属学校共同研究⁷⁾・⁸⁾におけるDVD教材を使った授業の研究から、DVD教材は伝統・文化に関する生徒の知識・理解、興味・関心、意欲・態度などを深める効果的な教材であることが明らかにされている。

もともと生徒は、伝統・文化を具体的な事柄と捉えている。例えば、「古式日本刀鍛錬」という言葉や、「刀」という言葉つまり一つの事象として捉えている。しかし、DVD教材はそうした具体的な事柄を視覚や聴覚を通して、明確に生徒に提示し、生徒の好奇心を満たすものとなれば、伝統・文化とは地域に根ざしたものであるという新たな認識を獲得し、伝統・文化を身近なものとして受け止め、自ら関わろうとする意欲を高めていくことができる。また、「伝統・文化」を漠然と捉えていた生

徒が、DVDの視聴の結果、一般的な理解を超え、具体的な対象として捉えるようになる傾向が見られる。このようなDVD教材を使った授業の研究結果が出された。このことから、古式日本刀鍛錬のDVD教材を地域の子どもたちが観ることを通して、子どもたちが、今まで知らなかった刀鍛冶の様子や、なぜ関市が刃物で有名なのかということに理解し、身の周りの自分たちの身近な伝統・文化について知ることができる。DVD教材を開発すれば、古式日本刀鍛錬は、関市に根ざした文化であると受け止め、自ら関わろうとする意欲をもたせることができる。さらに、DVD教材を観て、子どもたちが古式日本刀鍛錬について学んだこと、思ったことを子どもたちが自らの言葉で、他地域に住む子どもたちに自分たちの住む地域の伝統・文化を伝えることができるのであればよいと考える。子どもたちが後世に伝統・文化を伝えていく、継承していくためには、自分たちの地域のことを相手に語る力、つまり表現する力が必要となる。表現する力を身に付けるためには、自分たちの地域の伝統・文化について知らない他地域に住む人たちに、自分たちの地域の伝統・文化を紹介することが有効な手立てとして考えられる。そこで、子どもたちに他地域に住む人たちとの交流をする機会を設けることが必要であると考える。

他地域との交流をするには、地理的隔たりが懸念される。それを解消するために、テレビ会議システムの活用が考えられる。現在多くの学校において、電子黒板が導入されている。その大型モニタを完備した電子黒板でテレビ会議システム（Skype）を通じた交流の方法とするならば、地理的距離は何ら問題はない。また、テレビ会議を活用することにより、「相手に伝わりやすく話す」ことに対して、日常の直接的対面での「話す」ことより、抵抗感が生まれてくる。その抵抗感はよき抵抗感であり、日常より、より一層「相手」を意識し、「分かる」ことを意識し、表現するようになる。そのことから、相手を意識して「話す」ことにより、聞き手は、話し手の話しを意識して「聞く」ようになる。この関係が、「語る」と「聴く」の関係となり、より良いコミュニケーション関係が築かされていくようになってくる。

その過程を通して、子どもたちは自分たちの地域の伝統・文化をより深く考え、理解することになる。また、他地域の伝統・文化について教えてもらうことにより、自分たちの地域の伝統・文化と他地域の伝統・文化の違いに気づくことができ、より一層、自分たちの伝統・文化の良さに気付くことができ、地域の伝統・文化について興味・関心が向上し、誇りをもつようになる。そして、地域の伝統・文化について愛着をもつことができる。この、愛着によって後世にも伝統・文化を正しく語り継がれ受け継がれていくことになる。

この考えをもとに、他地域に自分の地域の伝統・文化を伝える教材づくりを行った。それをもとに、その教材を活用し、併せて、テレビ会議を活用した授業のデザインも考案した。

6. 授業デザインの流れ

ネイサン・シェドロフは、人間がデータを得て、どのように理解し、知識や知恵に変えていくのかといった流れを、図4のように「理解の外観」として表している。「人間は五感で得たデータを、それまでに有したさまざまな知識や経験を用いて情報として取り込み、それをさらに構成していくことにより、構造化された知識、さらには知恵にまで高めていく」と述べている。

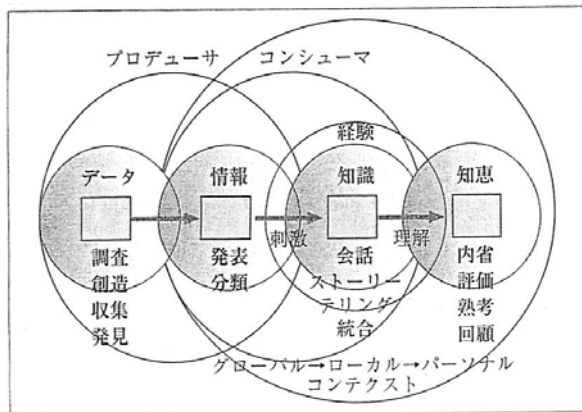


図4. 理解の外観

また、知識を深化する場合、発表又は会話が重要であると指摘している。

そのことから、地域の子どもたちに自分の言葉で、他地域の子どもたちに伝統・文化を伝えまた、他地域の子どもから、他地域の伝統・文化について教えてもらうという、自分たちの伝統・文化について交流し合うことを

考案した。そして、「発表や会話」を地域の伝統・文化の教育において重視する授業を考案した。授業中で、一単位時間もしくは、一單元の中で「発表や会話」をする時と場を設定し、子どもたちの地域の伝統・文化への理解を深化を図っていく、その授業デザインが以下のようなものである。

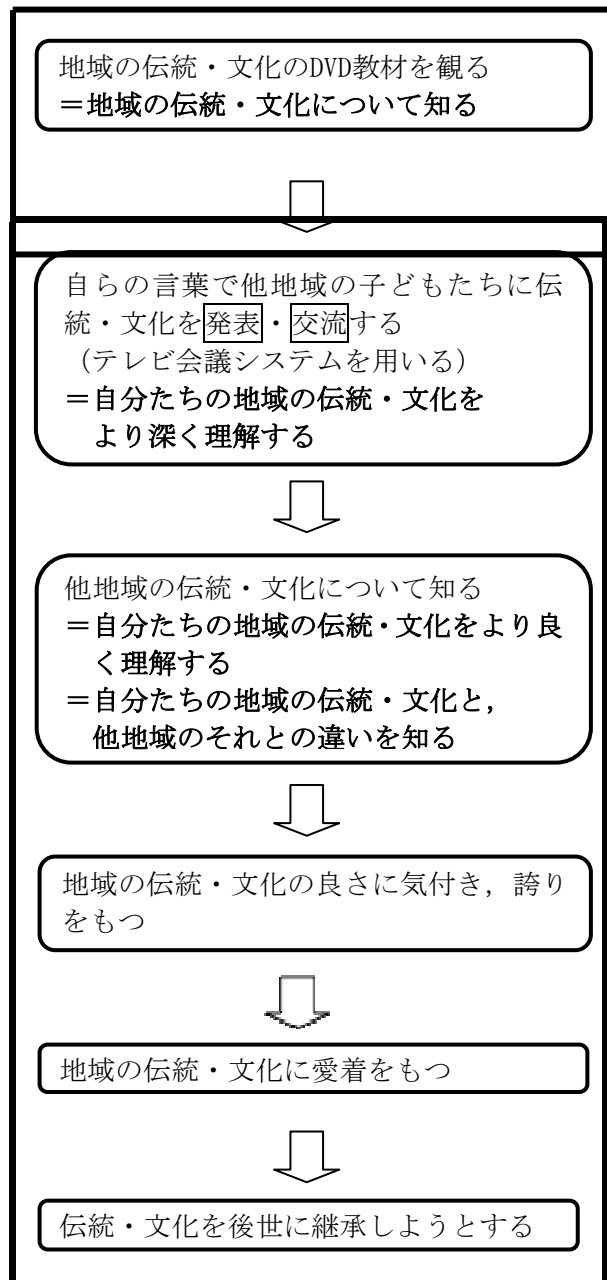


図5. 授業デザインの流れ

7. おわりに

現在、情報化・国際化の変化により今まで受け継がれてきた伝統・文化が失われつつあ

る。この失われつつある伝統・文化を継承していく必要がある。そのためには、今後の日本を背負っていく子どもたちが伝統・文化を継承し、子どもたち自らが伝統・文化を創り出していく心を育む教育が必要となる。継承して創造していくためには、表現する力が必要とされる。他地域と伝統・文化についてお互いに地域の伝統・文化を発表し、交流する機会を設けることで、自分たちの地域の伝統・文化について知るだけでなく、他地域の伝統・文化について知ることによって、自分たちの地域の伝統・文化の良さや異文化の違いについて知ることができる。また、伝統・文化について知ることによって、愛着をもつことができ、子どもたちは後世に伝統・文化を継承しようとすると考えた。

今後は、図5の流れにもとづいて実際に授業の実践を行う。そこで、子どもたちが伝統・文化についてどのような考えをもつことができたか、授業を評価し改善して、より良い授業デザインを考えていくことが、今後の課題である。

本研究の遂行においては、岐阜女子大学の久世均教授、齋藤陽子講師にご指導いただいた。ここに感謝の意を表します。

また、本研究は文部科学省の科学研究費補助金基礎研究(B)（課題研究番号20300278）を受けて進めていることを、感謝をもってここに付記します。

参考文献

- 1) 編者：関浩和『社会科の指導計画作成と授業づくり』2009年9月発行者：藤原久雄
発行所：明治図書出版株式会社
- 2) 編者：中村哲『伝統や文化に関する教育の充実—その方策と実践事例—』
平成21年7月1日発行者：福山善弘
発行所：(株)教育開発研究所
- 3) 齋藤・久世・松本・嘉手苺：「学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【VI】—新学習指導要領と伝統文化教材—」
日本教育情報学会 教情研究EI09-3 (2009-07)
P21-28
- 4) 小学校新学習指導要領
文部科学省ホームページ
- 5) 「2009～2010年版 新学習指導要領完全対応最新教育基本用語」
小学館 横山英行編集 2009年初版
- 6) 齋藤・久世・松本・嘉手苺：「学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【VI】—新学習指導要領と伝統文化教材—」
日本教育情報学会 教情研究EI09-3 (2009-07)
P21-28
- 7) 池野，小原，棚橋，升原，阿部，若杉，宮本，井上，宇都宮，李，田口，大國：「中学校授業における開発DVD教材「郷土の伝統文化」の効果性の研究(1)」
学部・附属学校共同研究紀要 no. 37 page. 211-216 (20090331)
- 8) 池野，小原，棚橋，草原，川本，有田，阿部，若杉，宮本，井上，宇都宮，李：「中学校授業における開発DVD教材「郷土の伝統文化」の効果性の研究(2)」
学部・附属学校共同研究紀要 no. 38 page. 281-287 (20100331)